TOP MUSEUM

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内
TEL 03-3280-0099　FAX 03-3280-0033
www.topmuseum.jp

建築×写真　ここのみに在る光

Architecture×Photography: A Light Existing Only Here

2018 年 11 月 10 日（土）～2019 年 1 月 27 日（日）

渡辺義雄
〈伊勢神宮〉より　《内宮東宝殿》　1953 年
東京都写真美術館蔵

展覧会概要

　現存する最も古い写真は1827年頃にジョセフ・ニセフォール・ニエプスによって撮影された、窓から見える「たてもの」の一角でした。写真と建築の関係は写真の黎明期の時代から密接にかかわっています。初期の写真技術では人や動物といった動くものは、撮影することが難しかったために、動かない建築は格好の被写体となったのです。また19世紀末は都市開発が進み、街の変貌が著しい時期でした。過去の建築や出来たばかりの建築を記録するために、写真という新しい技術が盛んに使用されました。そして現在にいたるまで、多くの建築が撮影されています。

　本展では東京都写真美術館のコレクションを中心として、さまざまな建築を捉えた写真を展示します。写真が発明された頃からどのような建築が写されてきたのか、そして現代の写真家がどのように建築を捉えてきたのかを紹介します。その中には、今ではすでに存在しないものや、実際に見ることが困難なものも少なくありません。写真家が建築を撮るときに感じた「光」を追体験していただけることでしょう。

展示構成・見どころ　（出品予定点数 約160点）

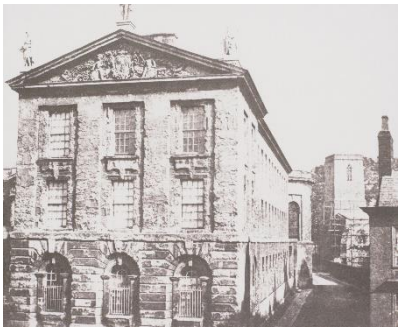
＜１章＞コレクションによる建築写真の歴史

東京都写真美術館のコレクションより、建築を捉えた写真を紹介します。

写真創成期に世界中で広まったダゲレオタイプ（銀板写真）や、世界初の写真集『自然の鉛筆』（1844-46年、ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット）には、建築をとらえた写真が多く見られます。また、20世紀にかけて世界各地で都市開発が進み、アントニオ・ベアトやウジェーヌ・アジェが古き時代の街並みを残すために、そして、ベレニス・アボットやベッヒャー夫妻が新しい時代の象徴として記録するために、写真で建築をとらえました。

写真表現の変化や撮影機材・技術の進化により、空撮や仰角のアングルを取り入れるなど、建築の写真もさまざまな表現がなされていきました。記録だけではなく、モチーフとしての建築の魅力が、多くの作品になっていきました。

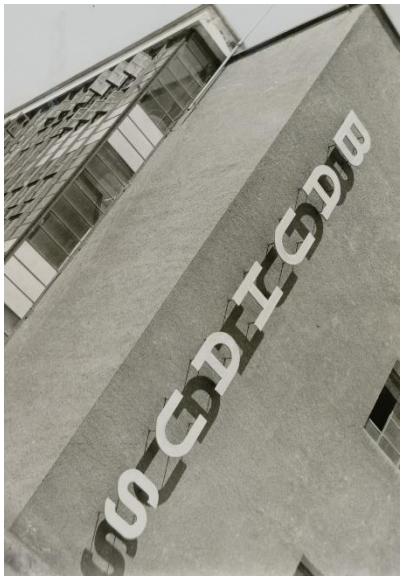
1


2

3

4

5


6

1）ジャン＝バティスト・ルイ・グロ 《ボゴタ寺院の眺め》 1842年 ダゲレオタイプ　2）ウィリアム・H・フォックス＝タルボット〈自然の鉛筆〉より《クィーンズ・カレッジの部分》 1844-46年 カロタイプ　3）ウジェーヌ・アジェ《 ラモワニョン館、パヴェ通り24番地》 1898年 鶏卵紙　4）江崎礼二 《江崎写真館》 1870-79年　鶏卵紙　5）ベレニス・アボット〈変わりゆくニューヨーク〉より 《ウォーター・フロント》 1938年 ゼラチン・シルバー・プリント　6）山脇巌（バウハウスの看板）1930-32年頃 ゼラチン・シルバー・プリント

※技法表記のない作品はすべてゼラチン・シルバー・プリント

※所蔵表記のない作品はすべて東京都写真美術館蔵

第１章の主な出品作家

ルイ・グロ　Jean-Baptiste Louis Gros（1793 – 1870）

フランス生まれ。フランスの外交官で、初期のダゲレオタイプ撮影家の 1 人。ボゴタおよびアテネ、フランス臨時代理大使を務め、ロンドンでは大使を務めた。1857 年と 1858 年には中国（清）と幕末の日本に外交使節として派遣されている。この間に多くのダゲレオタイプを撮影しているが、もっとも有名なのはアテネのアクロポリスを撮影したものである。

エドゥアール＝ドニ・バルデュス　Édouard=Denis Baldus（1813-89）

ドイツ・ヴォストファーレン生まれ。画家として活動していたが、1849 年に写真家に転じた。51 年、「ソシエテ・エリオグラフィーク」の設立メンバーの 1 人になる。55 年、ルーヴル美術館建設のための事業の撮影を引き受ける。写真の拡大はまだ 1850 年代には不可能だったので、パノラマ写真を作成するためにいくつかのネガを組み合わせて、より大きなスケールで画像を作成した。

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット　William Henry Fox Talbot (1800-1877)

イギリス・ドーセット生まれ。ケンブリッジ大学に学び、科学者として数学、天文学、物理学の論文を発表。1834 年頃からカメラ・オブスクラによって得られる像を化学的に固定する実験を始め、35 年、ネガ像の制作に成功、「フォトジェニック・ドローイング」と名付ける。39 年にフランスでダゲレオタイプが公表された後、41 年、より改良されたネガポジ法によるカロタイプを発表し、特許を取得。44-46 年、世界で最初の写真集『自然の鉛筆』（全 6 冊）を刊行した。

ジャン＝ルイ・アンリ・ル・セック　Jean-Louis Henri LE SECQ (1818-1882)

フランス・パリ生まれ。1840 年代初めに画家ポール・ドラロッシュの下で絵画を学ぶ。同じく写真家として著名なギュスターヴ・ル・グレイが同門におり、彼の薦めで建築写真家に転向した。51 年「ソシエテ・エリオグラフィーク」の設立メンバーとなる。同年フランス政府が設立した歴史的記念物委員会に依頼され、数多くの歴史的建造物を撮影した。教会建築、教会彫刻の撮影で知られるとともに、カロタイプ技法の改良（フレンチ・カロタイプの開発）にも携わった。

フェリーチェ・ベアト Felice Beato（1834-1909）

現在のギリシャ、キルケラ島（コルフ島）生まれ。義兄ジェームス・ロバートソンから写真技術を習得。1853 年に兄アントニオ・ベアトを加えた 3 人で「Robertson & Beato」を設立。55 年のクリミア戦争をはじめ第一次インド独立戦争や第二次アヘン戦争の戦場撮影で名声を得た。63 年に来日し、横浜の居留地に写真館を開設。日本の風景と風俗写真を掲載したアルバム『Views of Japan』を販売、日本イメージを欧米に輸出すると共に日本の初期写真に多大な影響を与えた。

江崎礼二　(1845-1910)

美濃国厚見郡江崎村（現・岐阜市江崎町）生まれ。1870 年に上京、柳川春三の『写真鏡図説』で湿板写真術を独学する。横浜で下岡蓮杖の教えを受け、71 年、東京・芝で写真館を開業。72 年、浅草・奥山に移転。明治初期の東京を代表する写真師の一人となる。当時欧米で実用化された写真乾板を 83 年には輸入。同年、隅田川で行われた水雷爆破の瞬間を撮影、湿板写真に比べて感度が高く露光時間が短い乾板の特性を生かした「早取り写真」によって名声を得た。

ウジェーヌ・アジェ　Eugène ATGET (1857–1927)

フランス・リブルヌ生まれ。1879 年パリ国立演劇学校に入学するが、兵役のため演劇を中断、90 年初頭からパリの街を撮り始め、「芸術家のための資料」という看板を掲げて、公的機関やアーティストらに写真を販売する。1925 年、マン・レイに見出され、機関誌『シュルレアリスム革命』に写真が掲載される。死後、遺された写真は、ベレニス・アボットによってアメリカに持ち込まれ、ニューヨーク近代美術館に収蔵、「近代写真の父」と呼ばれる存在になった。

ベレニス・アボット　Berenice ABBOTT (1898-1991)

アメリカ・オハイオ州生まれ。大学でジャーナリズムを専攻。ニューヨーク、パリ、ベルリンで彫刻を学んだ後、1923 年、マン・レイのアシスタントを経て、パリにスタジオを開設。25 年のウジェーヌ・アジェとの運命的な出会い以降、彼の業績を世に知らしめる仕事を献身的に行なう。1930 年代の激変するニューヨークをドキュメントした『Changing New York（変わりゆくニューヨーク）』(39 年)を出版し、高い評価を得る。

ウォーカー・エヴァンズ Walker EVANS （1903-1975）

アメリカ・ミズーリ州生まれ。パリ、ソルボンヌ大学で文学を学んだ後アメリカに帰国、1927 年に写真を始める。35-37 年ニューディール政策の一環として FSA（農業安定局）の依頼によって撮影した南部の農村地帯の記録写真は代表作となった。38 年ニューヨーク近代美術館で写真家として初めて個展を開催、写真集『American Photographs』を出版。ドキュメンタリー・スタイルによるアートとしての写真を唱え、アメリカの本質的なイメージを作り出した。

山脇巌 （1898-1987）

長崎生まれ。1926 年、東京美術学校図案二部（現・東京芸術大学建築科）を卒業後、横河工務所に入所。この頃から新興美術グループ「単位三科」に所属し、創作活動を行う。28 年、山脇道子と結婚し、山脇姓となる。30-32 年、美術家・仲田定之助の勧めでドイツ・デッサウのバウハウスに道子と共に留学。ミース・ファン・デル・ローエ、カンディンスキーらに学ぶ。建築やフォトモンタージュを習得し、32 年帰国後、帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）校長等を経て、47 年、日本大学芸術学部デザイン学科教授。同年、小杉二郎らと設計事務所「生産工芸研究所」を設立した。

ベルント＆ヒラ・ベッヒャー　Bernd and Hilla Becher（1931-2007, 1934-2015）

ベルント・ベッヒャーはドイツのジーゲン生まれ、シュトゥットガルトとデュッセルドルフの美術アカデミーで絵画やタイポグラフィーを学んだ。ポツダム生まれのヒラ・ボベザーとデュッセルドルフで出会い、1959 年から共同制作。61 年結婚。70 年に最初の作品集『匿名的彫刻―工業的建築物のタイポロジー』を刊行。採掘塔など近代化に貢献した建築物を大型カメラで即物的に撮影した。ベルントは 1976 年よりデュッセルドルフの美術アカデミーで写真の教授となりヒラと共に指導にあたる。アンドレアス・グルスキーやトーマス・ルフ、トーマス・シュトルートなど国際的な写真家を輩出。

★19 世紀の写真技法★

ダゲレオタイプ

ルイ・ジャック・マンデ・ダゲール（仏）が 1839 年に公表した世界最初の実用的な写真術。銀メッキをした銅板にヨウ素の蒸気をあてて光に感じるようにして撮影する。現像は水銀の蒸気で行う。日本では「銀板写真」とも呼ばれる。大変シャープな画像だが、一回の撮影で 1 点しか作ることができない。

カロタイプ

ウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット（仏）が 1841 年に発表した、紙をベースにしたネガ／ポジ方式による写真術で、これにより写真の複製が可能になった。銀の化合物を染みこませて感光性を与えた紙をカメラに装着して、撮影をしたのち現像して陰画（ネガ）をつくる。それを単塩紙に密着させて太陽光で焼きつけて陽画（ポジ）をつくる。

湿板写真（アンブロタイプ）

フレデリック・スコット・アーチャー（英）が 1851 年に発明した、ガラス板に感光乳剤を引き、それが乾かないうちに撮影・現像をする湿式コロディオン方式による写真術。通常はネガを作るための方式だが、ガラス板ネガをそのままポジとして見るのがアンブロタイプである。この方式によるネガ像は光のあたったところが灰白色になるので、ガラス板の下に黒い布などを敷くとポジ像として見ることができる。

鶏卵紙

ルイ・デジレ・ブランカール・エヴラール（仏）が 1850 年に発明をした、19 世紀を通して一般的に使われた印画紙。卵の白身に食塩を混ぜ紙に塗り、乾いた後に硝酸銀溶液を塗り、光に感じるようにする。ネガを密着させ、太陽の光で焼き付けると赤褐色の画像が現れる。現像は不要。日本を訪れた外国人観光客におみやげとして売られた「横浜写真」は、この上に手彩色がなされている。

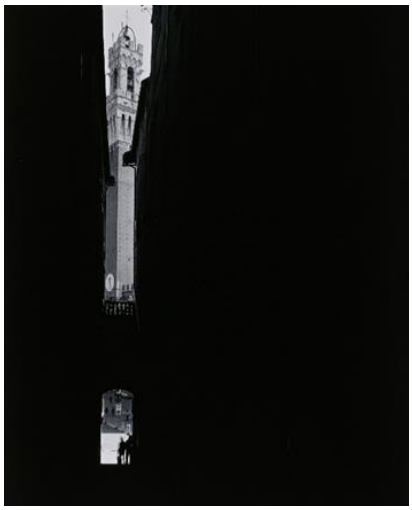
＜２章＞建築と写真

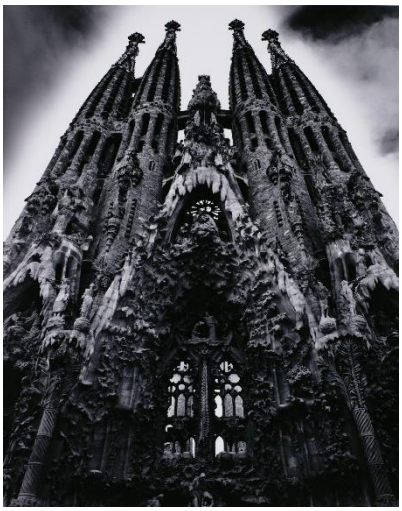
東京都写真美術館のコレクションを中心に、11 人の写真家が建築をテーマとして撮影した作品を一堂に紹介します。

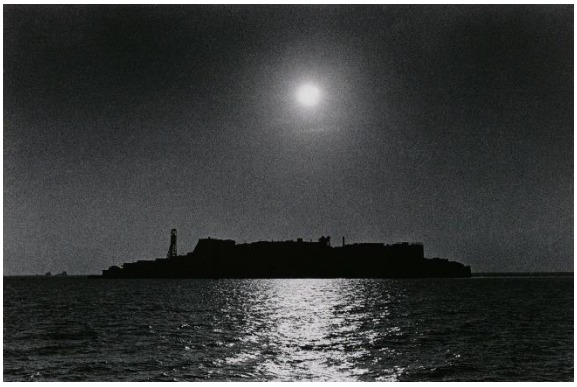
＜11 人の写真家＞
渡辺義雄、石元泰博、原直久、奈良原一高、宮本隆司、北井一夫、細江英公、柴田敏雄、
二川幸夫、村井修、瀧本幹也

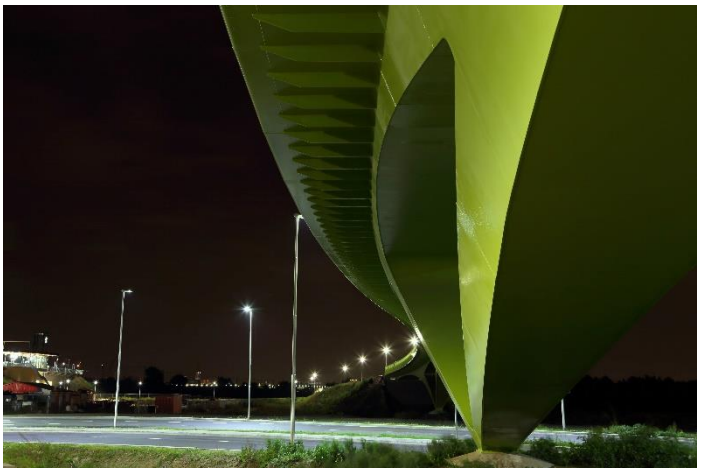
被写体となる建築は、アントニオ・ガウディや丹下健三をはじめ、だれもが一度は耳にしたことのある著名な建築家が設計した建築から、1950 年代の日本の民家や香港の九龍城砦、自然の地形を巧みに利用した中世の山岳丘上都市など、建築家の名前が残っていないものまでさまざまです。現存しない建築や実見が不可能な建築を、ダイナミックに目の当たりにできるのも、建築写真ならではの醍醐味です。それらの作品は写真家のユニークな視点によって、普段は気づきにくい側面や細部をあぶり出し、新たな魅力が表現されています。

7

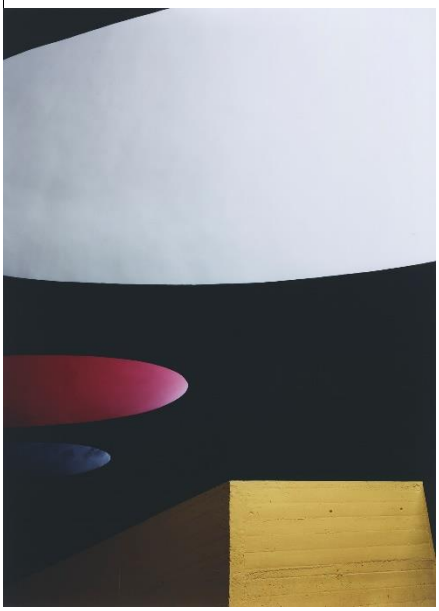

8


9


10


11

7）渡辺義雄 〈伊勢神宮〉より 《内宮東宝殿》 1953 年　8）原直久〈イタリア山岳丘上都市〉より 《シエナ、イタリア、1984》 1984 年　9）細江英公〈ガウディの宇宙〉より 《サグラダ・ファミリア #179》 1977 年　10）奈良原一高〈人間の土地〉より 《緑なき島－軍艦島：軍艦島全景》 1954-57 年　11）柴田敏雄 《‘ ‘t Groentje’ Bicycle Bridge, Nijmegen, The Netherlands 2013》 インクジェット・プリント 2013 年 作家蔵 ©Toshio Shibata
※技法表記のない作品はすべてゼラチン・シルバー・プリント　※所蔵表記のない作品はすべて東京都写真美術館蔵



12

13

14

15

12）瀧本幹也〈 Le Corbusier〉より 《Couvent de la Tourette # 40》 発色現像方式印画 2018 年 作家蔵 ©Mikiya Takimoto, Courtesy of MA2 Gallery　13）石元泰博　＜桂＞より《中書院東庭から楽器の間ごしに新御殿を望む》1981-82 年　14）宮本隆司〈九龍城砦〉より　1987 年　作家蔵 ©Ryuji Miyamoto　15）村井修〈Moment〉より《国立屋内総合競技場》 1964 年　※作品はすべてゼラチン・シルバー・プリント　※所蔵表記のない作品はすべて東京都写真美術館蔵

第 2 章の出品作家

渡辺義雄（1907-2000）

新潟生まれ。1925 年、小西写真専門学校（現・東京工芸大学）入学。28 年オリエンタル写真工業入社。31 年『フォトタイムス』の編集に従事。33 年には新即物主義の流れをくむ斬新な構図の建築写真《御茶の水驛》を発表するなど、近代写真の先駆的な仕事を行う。34 年、グラフ雑誌『NIPPON』の撮影に携わる。53 年伊勢神宮の式年遷宮で、写真家として初めて内宮・外宮の御垣内を撮影。以降も継続的に撮影した唯一の作家である。90-95 年東京都写真美術館初代館長。

石元泰博（1921-2012）

アメリカ・サンフランシスコ生まれ。48 年シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（通称ニュー・バウハウス）に入学し、ハリー・キャラハンらに師事。53 年帰国し、桂離宮の撮影を開始、60 年写真集を出版（日本語版は 71 年）。69 年に写真集『シカゴ、シカゴ』を出版。都市風景を優れた造形感覚で捉える一方で、曼荼羅や伊勢神宮など日本の伝統美術、建築を撮影し写真集にまとめる。丹下健三、菊竹清訓、磯崎新などの建築を数多く撮影したことでも知られる。2005 年生涯の全作品約 7000 点を高知県立美術館に寄贈した。

原直久(1946-　)

千葉生まれ。1971 年、日本大学芸術研究所修了。ライフワークとして、フランス、ドイツ、イタリア、スペインといったヨーロッパの都市と自然との関わり、アジア各地の都市風景を大型カメラによって捉えてきた。76-77 年には文化庁派

遣芸術家在外研修員としてフランス、ドイツで研修。84-85 年には日本大学長期海外研究員としてパリを拠点に研究および制作活動を行う。94-2016 年まで日本大学芸術学部教授を務める。

奈良原一高 （1931- ）

福岡生まれ。1954 年、早稲田大学大学院美術史専攻修士課程に入学。55 年には池田満寿夫、靉嘔ら新鋭画家のグループ「実在者」に参加。河原温、瀧口修造らとも交流を深める。56 年、長崎・軍艦島（端島）、鹿児島・黒神村をテーマとした「人間の土地」、58 年、和歌山の婦人刑務所と北海道の修道院を撮影した「王国」を発表。59 年、東松照明、細江英公らとともに写真家集団「VIVO」を設立。60-70 年代に「ヨーロッパ・静止した時間」、「消滅した時間」等で国際的な評価を得る。96 年紫綬褒章など受賞多数。

宮本隆司（1947- ）

東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。78 年写真家として独立。建築物を中心に、都市の変貌・崩壊と再生を独自の視線で撮影した。建築の解体現場を撮影した「建築の黙示録」(86 年)、香港の高層スラムを撮影した「九龍城砦」(88 年)で高い評価を受ける。89 年に第 14 回木村伊兵衛写真賞を受賞。96 年「震災の亀裂」を「第 6 回ヴェネツィア・ビエンナーレ建築展」日本館に共同出品し金獅子賞を受賞。

北井一夫（1944-）

満州生まれ。65 年、日本大学芸術学部写真学科中退。同年、横須賀の原子力潜水艦寄港反対闘争をテーマにしたモノクロ写真集『抵抗』を自費出版する。69 年、朝日新聞に新東京国際空港建設反対闘争を取材した記録を連載。71 年に「三里塚」シリーズで第 22 回日本写真協会新人賞を受賞。74 年、日本の変わりゆく農村の風景を取材した〈いつか見た風景〉を発表。76 年、第 1 回木村伊兵衛賞を受賞。

細江英公（1933- ）

山形生まれ。戦後、東京で田村栄の指導を受ける。52 年、東京写真短期大学（現・東京工芸大学）に入学。写真評論家・福島辰夫を介して美術作家・瑛九と出会い強い影響を受ける。59 年、写真家集団「VIVO」を設立。63 年、三島由紀夫がモデルの『薔薇刑』で高い評価を受ける。土方巽を撮影した『鎌鼬（かまいたち）』（69 年）で芸術選奨文部大臣賞を受賞。2003 年、英国王立写真協会創立百五十周年記念特別賞を受賞。

柴田敏雄（1949- ）

東京生まれ。74 年、東京芸術大学美術学部大学院修了。75 年、ベルギー市王立アカデミー写真学科入学。79 年に初個展「冬のヨーロッパ」を開催。88 年、日本各地の造成地を大型カメラで捉えた個展「日本点景」、89 年の個展「日本典型」が高い評価を受け、92 年に木村伊兵衛写真賞受賞、写真集『日本典型』を刊行する。09 年、日本写真協会作家賞を受賞。

二川幸夫（1932-2013）

大阪生まれ。早稲田大学文学部で美術史を専攻し、在学中に古建築を見る旅で飛騨の民家に出会う。以後 6 年を掛けて日本の民家を巡り、57 年に『日本の民家』（美術出版社）全 10 巻を発表。70 年には、建築書籍の編集、出版を専門とする A.D.A. EDITA Tokyo Co., Ltd.を設立し、建築雑誌『GA』などを発行。世界の現代建築を記録した。

村井修（1928-2016）

愛知生まれ。東京写真工業専門学校（現・東京工芸大学）を卒業。建築や彫刻を被写体とした写真家活動を始め東京で独立。丹下健三、白井晟一の建築など数多くの建物を撮影し、80 年代には数年間に及ぶ京都迎賓館の撮影を手掛けた。彫刻分野では、佐藤忠良氏、流政之氏、澄川喜一氏らの作品撮影。米タイムライフ社の取材にもかかわり、雑誌『LIFE』のテーマ「家族」日本編を担当するなどスナップ写真の作品も手がけた。

瀧本幹也（1974-）

愛知生まれ。94 年より藤井保氏に師事。98 年に写真家として独立。広告写真をはじめ、グラフィック、エディトリアルワーク、自身の作品制作活動、コマーシャルフィルムなど幅広い分野の撮影を手がける。12 年からは映画の撮影にも取り組む。15 年には『海街 diary』（是枝裕和監督作品）で第 39 回日本アカデミー賞最優秀撮影賞を受賞。

関連イベント

対談 ①

ゲスト　藤森照信（東京都江戸東京博物館館長・建築史家）× 宮本隆司（出品作家）
日　時　2018 年 11 月 23 日(金・祝) 15:00〜16:30

対談 ②

ゲスト　中村良夫（東京工業大学名誉教授）× 柴田敏雄（出品作家）
日　時　2018 年 12 月 2 日(日) 15:00〜16:30

入場料　無料
定　員　各回 50 名
場　所　東京都写真美術館 1 階スタジオ（整理番号順入場／自由席）
＊各日、当日 10 時より 1 階総合受付にて整理券を配布します

視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

障害の有無にかかわらず、多様な背景を持つ人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術を鑑賞するワークショップです。
日　時　2018 年 12 月 9 日(日) 10:30〜13:00
対　象　どなたでもご参加いただけます。
定　員　7 名（事前申込制）
参加費　500 円（別途本展観覧チケットが必要です）
※申込方法の詳細は決定次第、お知らせいたします

展覧会担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第 1・第 3 金曜日 14:00 より担当学芸員による展示解説を行います。
展覧会チケット（当日消印）をご持参のうえ、3階展示室入口にお集まりください。

展覧会図録

出品作品図版、学芸員のテキスト、作家紹介、出品リストなどを掲載した展覧会図録を発行します。
執筆者　藤村里美（当館担当学芸員）　発行　ミルグラフ
当館2階ミュージアムショップ「ナディッフ バイテン」にて販売します。

開催概要

主　　催　東京都 東京都写真美術館
協　　力　株式会社写真弘社／有限会社フォトグラファーズ・ラボラトリー
会　　場　東京都写真美術館 3階展示室
東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tel　03-3280-0099　URL　http://topmuseum.jp
開館時間　10:00–18:00（木・金は20:00まで）
ただし12月28日（金）と2019年1月4日（金）は10:00–18:00、2019年1月2日（水）、3日（木）は11:00-18:00　※入館は閉館の30分前まで
休 館 日　毎週月曜日　※ただし、12月24日[月・振休]および2019年1月14日[月・祝]は開館し、12月25日[火]、2019年1月15日[火]、12月29日[土]～2019年1月1日[火・祝]は休館
観 覧 料　一般600(480)円、 学生500(400) 円、中高・65歳以上400(320)円
※（ ）は20名以上の団体料金
※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料
※第3水曜日は65歳以上無料
※2019年1月2日（水）は無料

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いいたします。
また、図版のトリミングや文字掛け等の加工はできません。

東京都写真美術館
〒153-0062　東京都目黒区三田 1-13-3　恵比寿ガーデンプレイス内
Tokyo Photographic Art Museum
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan
Tel　03-3280-0034　Fax 03-3280-0033　http://topmuseum.jp
展覧会担当　藤村里美 s.fujimura@topmuseum.jp　石田哲朗 t.ishida@topmuseum.jp
広 報 担 当　久代明子　平澤綾乃　前原貴子 press-info@topmuseum.jp